水上勉全集

25

水上勉全集　第二十五巻

昭和五十三年三月十日印刷
昭和五十三年三月二十日発行

著者　水上勉
発行者　高梨茂
印刷者　白井倉之助
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ八ノ七
電話(五六二)五九二一
振替東京二―三四
検印廃止
一九七八©

目次

決潰　3
棺の花　147
ちりめん物語　323
あとがき　461

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

決

潰

一章

戸叶磯次とみはるの住んでいる根岸の家は浦和市のはずれにある。市の人びとがこのあたりを根岸とよんでいるのは、市を通貫する旧中仙道がこの辺にくると急に水田地帯に落ちこんで、町は急傾斜の崖に沿いはじめるからであった。根岸とは崖の根にそうているのを意味しているのであろうが、市制のしかれる前までは、たぶん、このあたりはそんな名で呼ばれていたものらしく、現在の呼称である「白幡台」は、どちらかというと名にそぐわない。

湿った藁ぶき屋根の農家と、杉皮や波トタンでふいた屋根のひしゃげた穫入れ小舎がコブのようにならんでみえる旧街道ぞいは、ところどころ、大きな欅や椎の木にかこまれた旧家などもあって、一見、古風な落ちついた町にもみえる。しかし、いったん裏にはいってみると、ひどくごみごみしていた。ベニヤ板囲いにスレートぶきといった安建築の家々が、それぞれの区画をなして長屋のように建て混んでいるのであった。

太平洋戦争が終って間もないころ、東京への転入が禁止になったことがある。締め出しを喰った人びとが通勤時間などの点も考慮に入れて、ここらあたりの農家に泣きつき、なけなしの金をはたいて仮住居のつもりで建てた俄か建築であった。目さきのことにするどい農家の主人たちは、

切り換えられた新円欲しさから、それまでは死地といわれていた陽陰地の蕗やみょうがの群生していた畑を、わずかに地ならしだけして、途方もない地価で分譲したものだ。

家々はてんでんばらばらに背中を向けあって建っていた。玄関先と便所とをくっつけあうようにしてならんでいたり、一つ垣根の中に、六畳ひと間しかない家が四戸も、一つだけの便所と井戸を取りまいていたりした。

ひどい低地だった。雨が降ると、この長屋に通じる道路は、黒土の出た畑もろとも、べとべとにぬかるんだ。崖の上に曹洞宗弘善寺というかなり広い境内をもつ寺があったが、その赤銅屋根の伽藍と森が、押しかぶさるように町の空をさえぎっている。道も屋根も乾燥したことのない一帯であった。

弘善寺の森は、欅、櫟、栂、もちの木の類が密生していた。その中に、梢へゆくほどに黄色く透けてみえるまだら模様のまるい葉が、魚のうろこのように重なっている背のひくい木が、一、二本みえた。戸叶磯次は、その木が白金のように光る小さな花を咲かせるのを崖の下から見たことがある。しかし、その木がなんという名称の木なのか、ついぞ知らずじまいに終った。

森の下は墓地になっているとみえて、雨ざらしの塔婆の頭や、はげた石塔の頭がとびとびに見えていた。端にくると木の柵があって、柵下は自然石で積みあげた石垣の崖になっている。年月を経た様相は、この石垣一つにも出ていた。ボロボロの石と石との合間に土がたまり、蔦や蕗や三つ葉などの蒼黒い葉が、まるで壁のようにひろがっている。六月が来ると、それらの葉のうらで、蛇苺の赤い果が、どす黒い血のような色をのぞかせはじめた。吹出物のように崖いちめんを

這いまわってゆく蛇苺の果は、見ていてあまり気持のいいものではない。

戸叶磯次は、それでなくても鬱陶しい梅雨どきに頭を重くしていたが、いっそのこと、鎌かなんぞを振りまわして、崖いちめんを被っている葉の壁を思いきり刈りこんでみたい発作にかられることがあった。しかし、高い崖の壁はどうすることもできない。草々が枯れるまで眺めているよりほかなかった。

それにしても妻のみはるは、それらをなんとも感じなかったらしい。

「たべられないかしら」

受唇のしゃくれた顔を心もち仰向け、手の届くあたりからちぎってきた赤い苺の果を、汁のたれたまま指先でつまんできた。

「おいしいみたい」

「馬鹿、そいつは毒があるんだぞ」

磯次はどなり、捨てろ、捨てろ、といった。戸叶磯次は子供のころ、日本海辺の田舎に育っていて、親たちから蛇苺だけは食べるな、といわれてきたものだ。蛇苺はふつうの苺よりも、きめがこまかい。ぶつぶつした粒子も小さくて、肌もなめらかである。ぬめったように水っぽいのだった。しかし、よくみると、粒子と粒子のあいだからほそい無気味な繊毛が無数に生えていた。

都会育ちのみはるは、毒の果も、果物屋の店さきの果も、かわりなく見たのであろうか。みはるは樹や花などについて、興味をふかくする性質ではなかった。窓からみえる崖の草々の日を追うごとに変貌してゆく有様も、森の中で金粉のような花を光らせている名も知れぬ木についても、

いっさい無関心のようであった。

みはるは、東京の日本橋近くにあるシロキクラブという会員制のナイトクラブにつとめていた。

戸叶磯次は、毎日ぶらぶらしているようにみえた。しかし、彼には定職がなかったわけではない。磯次は教育幻燈協会というスライド製作会社につとめていた。しかし会社は小資本のためもあって、その年の春ごろから、大会社の圧迫をうけて販路が減り、左前になった。給料も遅配になって、いきおい、会社に出る日も少くなり、磯次は自然退職のかたちになっていた。磯次は幻燈製作係だった。その時おぼえた技を利用して、「日本幻燈」や「学校教材販売」へ作品を売り込みだした矢先でもあったので、根岸のこの家が彼の仕事場ともいえた。

磯次は一日じゅう部屋に閉じこもって、机の上に画用紙をひろげ、絵を描いたり、その絵の解説文を書いたりしていた。それらを十八コマか二十コマの写真フィルムに撮って一巻ものにまとめてゆく仕事は、近所の人からみると、想像もつかない奇妙な仕事に思えたらしい。暗室に入って出てこないような一日もあったし、たまに寝呆けたような顔をして畑の道に出てぼんやりしている磯次をみると、人びとは失業者にちがいないとみたものである。

幻燈スライドには、競争作家もいた。創ったものがすぐ売れるというものではなかった。相手の会社の企画に都合よくのればよかったのだが、それらの会社にはお抱えの作家がいたし、いきおいフリーの持ち込みはあと廻しにされる。収入も跡切れがちだった。

みはるが夜の勤めをはじめたのもその理由によった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

戸叶磯次は福井県の若狭に生れた。磯次は幼少の頃、京都に出て、臨済宗の本山である相国寺の小僧になっていたが、中学を卒業するころにその寺をとび出ている。理由は禅寺のきびしい修行生活に厭気がさしたためであった。しかし、若狭の村の生家は貧しく兄弟も多く、それに親たちに相談もせずに寺をとび出したこともあって、そこへ帰るわけにはゆかなかった。寺を出た十八歳の磯次は、京都の町々を放浪しながら、薬局店員になったり、新聞売り子をしたり、その他いろいろの職業を転々としたらしい。磯次がのちに絵を描くようになったのは、相国寺の小僧をしていたころの縁である。ちょうどその寺に、京都画壇の鳥獣画家で、かなり名の通った岸本南嶽という六十近い画家が絵を描きにきていた。磯次は寺を出てから、インクライン近くの南嶽の家で書生のようなことをしばらくした経験があったからである。

磯次が東京に出て瀬木みはると知ったのは、東中野の神田川に近い柏木五丁目のアパートで絵を勉強しながら出版社につとめていたころだ。みはるはそのころ新宿の風車劇場で踊り子をしていた。

磯次は風車劇場に観客の一人として足しげく通っているうちに、みはるを見染めた。みはるが十九、磯次が二十一のときである。風車劇場は気のきいた社会風刺劇などを上演して、山の手階級の人気をあつめていたが、みはるは、そこに二十人ばかりいた踊り子の中でも最も目立たない存在だった。柄も小さく、顔も舞台映えのしないところがあり、とうてい踊り子として将来性のないことは本人もわかっていた。みはるはいつも舞台のうしろで、小さな顔を半泣きのようにしかめ、長くもない足をふりあげていたが、知りあってからすぐ磯次に惹かれたのも、たぶんに収

入の少い経済事情が作用していたといえよう。

といっても、戸叶磯次に多大な収入があったわけではなかった。磯次は神田の出版社につとめていたけれど、給料のほかに、アルバイトでカットやポスターのデザインなどの注文をとったりしていたから、みはるよりはいくらか金廻りはいいといえた。伊勢松阪の父母の家をとび出して、東京の叔母をたよってきていたみはるは、化粧品代にも事欠く生活だった。磯次が似合った相手といえたかもしれない。

みはるは大塚坂下町の叔母の家に住んでいた。叔母の亭主は自宅を封筒工場にしていて、階下では波の音のような騒音をだす製袋機が一日じゅううなり、家のなかには紙ぼこりが充満していた。ふた間しかない二階の三畳をあてがわれていたみはるは、知りあって三月目に、磯次のアパートへ越していって、同棲をはじめた。

磯次は、みはるのような女が好きであった。顔が小さくて、顎が心もちしゃくれて受口である。五尺そこそこのほっそりした体つきだが、裸になると、みはるの乳房は椀を伏せたような豊満なふくらみをみせていた。胴がくびれていて、臍のあたりから股にかけ、胸よりはやや黒みをおびてぴちぴちした皮膚が、湿ったような艶をみせているのも、磯次の好くところであった。襟首から耳うらへかけてまだ生毛のはえているようなところのある子供子供した部分と、年増のような匂いを発散する肉の部分とが同居している。そんなみはるの体を磯次は得がたいものに思った。磯次はみはるを愛撫するたびにしびれた。

磯次は十年間も手紙一つしなかった若狭の親に、みはるのことを詳しく書いて、結婚の許諾を

得ている。その返事がくるとすぐ籍を入れた。みはるの伊勢の父母たちは、そのころ、松阪を食いつめて奉天にわたっていた。みはるは事後承諾のかたちで、親たちを納得させる結果になった。蜜蜂の巣のような甘い生活のつづいた若夫婦は、やがて逼迫してゆく太平洋戦争下の東京で、終戦の前年まで頑張りつづけた。空襲がひどくなるに及んで、東京都知事の声明による三百五十円の疎開奨励金をもらい、磯次の故郷である若狭の村に帰った。そして磯次は、村から五里ほどはなれた山の上の分教場で代用教員をすることになった。磯次は、住宅をかねたこの学校をえらんで一年間ほどつとめていたが、九歳の時に寺へ出たままふりかえらなかった故郷である。東京から嫁をつれて戻ったことでもあり、何かと気苦労もつづいた。八月十五日の終戦をラジオで知ると、磯次はすぐ東京に舞いもどる決意を固めた。みはるをつれて、山の分教場を下り、焼野原の東京に帰ってきたのは九月のはじめであった。この年まで二人の生活に五年の歳月が流れていた。

濃灰色の重い空が、ときどき箒でひとはきしたように雲の割れ間をみせることがある。弘善寺の青錆びた赤銅の屋根が鶯いろに光りはじめると、漆をぬったようにぬれてみえる伽藍の手前の森の葉が鬱陶しくうごいた。戸叶磯次のひっこんだ白眼の部分が、うっすらと翳るようになったのは五月の終りごろである。磯次の両瞼の周囲にくまどりが見えはじめ、わけもなく小刻みに咳が出たりするのだ。

「変ねえ。咳が出たりしてさ、どっかわるいんじゃない」

薪割りをしている磯次の傍に立って、みはるが物干竿をふきながらいっている。磯次は鉈をに

ぎっていた。その鉈は磯次が暇にまかせて砥石でといでいるため、刃先の部分が錫色にひかっている。磯次は、栗材か何かの大束を薪炭屋から買ってきて、それを釜にくべやすいようにいちいち丹念にこまかく刻むのを日課にしていた。家全体がしめっていて、夜のおそいみはるが朝の支度の都度、いらいらしながら火つきのわるい薪を何本も地べたに投げつけているのをみるのが、磯次にはしのびないのであった。

「医者へいったらどう」

その医者にも診断はうけていたが、べつだん異常はないという。梅雨どきの気候不順の折から、健康な者でも、気分がそんな風になりがちだと医者にいわれ、磯次は帰ってきていた。しかし、自分でも驚くほど顔の相がかわってきているのはわかった。

栄養失調かも知れない、と磯次は思っていた。若狭にいるころは、生家が近かったから、それでも白米が手に入った。しかし、浦和にきてから、朝昼はうどん粉のパンかすいとんである。夜、わずかに米の入った麦飯をたべることができた。日増しにやせていくのも無理からぬことだったろう。国民全部が政府の配給してくれる僅かな外米とうどん粉を、茶碗ではかりながら少しずつたべているような時節でもあった。

「どこもわるくないさ。わるいのはもっとほかのこった」

と磯次はいった。陰気な顔で、ぶつぶつそんな物言いをする磯次をみはるは眺めていて、吐息をついた。

「この家がいけないのよ。いいわ、あたし、じゃんじゃん稼いで、もっといいところに引っ越し

てやっから」

もともとこの家はみはるの才覚で手に入れたものである。封筒工場をもっている坂下町の叔母が、焼けのこった機械を修理に出して、また元の土地に工場と住宅を建てた。それをしおに引っ越してきたのだ。叔母夫婦の住んでいたあとにうまくもぐりこんだといった方があたっている。六畳と四畳半ふた間の間取りは、二人だけの生活に不足はなかったが、陽当りがわるくて不健康なことはみはるにも気に入らなかった。しかし、みはるの場合は磯次と少し事情がかわっている。磯次が幻燈フィルムをつくりながら一日じゅう家にいるにひきかえ、みはるは四時になると大急ぎで家を出てゆく習慣であった。

浦和駅まで歩いて十五分。省線にのって四十分。神田から日本橋まで都電で四分。この道のりをみはるは精密に計算していた。クラブで行われる五時の点呼に遅刻すると、手当が減らされることでもあり、判で捺したように三時半になると化粧をはじめる。夜がおそいから、たいがい朝は十一時すぎまで寝ているみはるにとって、陽当りのわるいこの家ですごすのは、わずか四時間たらずであった。

「いっきにどうしようたって、どうなるものでもないよ」

鉈の食いこんだ薪を地べたに打ちつけながら、ぼそりと磯次はいう。

「この家だけでもありがたい」

その言葉のうらには、無理して稼いだって、そう簡単にこの家が越せるものではないということを暗示していた。

みはるは、月に一万円ぐらい稼いでくる勘定だった。クラブの中でもみはるはダンス部であったから、踊っていればそれでよかったのだが、ホステスとちがってチップは厳禁されていた。しかし、このころの一日三百円の収入は大きかったといわなければならない。当時、男が一流の会社でもらった給料は七、八千円前後であるから、みはるはじゅうぶん男なみの稼ぎをしてきたわけであった。

東京には、そのころ、上級のクラブは三つしかなかった。赤坂のE、銀座のM、それと日本橋のシロキクラブであった。戦後間もない虚脱状態のときに、いちはやくそうした高級クラブが出来て、都民は眼を瞠ったものである。客すじは概ね、ブローカーや新興成金にかぎられていた。そしてときどき進駐軍将校やバイヤーなども、日本の関係業者につれられてゆくようであった。

磯次は、浦和へ越してくる前は、みはるの叔母の封筒工場と取引きしている神田の紙屋の二階にいたこともあって、終戦直後の混乱した東京の模様はよく知っていた。幻燈協会がまだ活発だった頃は、同僚たちと神田駅かいわいの闇市場のわきに並んだ呑み屋の椅子に腰かけて、カストリ焼酎を呑んだ経験もある。新橋にできた日本人専用の、うす穢いキャバレーにも一、二度いったことがあったから、シロキクラブの内容についてだいたい想像はついていた。

しかし、磯次は実際にシロキクラブに行ったことはなかった。もちろんここは特権階級ともいうべき人たちの社交場であるから、磯次などが簡単にゆけるところではない。しかもみはるがほかの男たちに抱かれて踊っている光景をみるにしのびなかった。

磯次はみはるに働くことをすすめたわけではない。幻燈協会がつぶれて収入がなくなったとき、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com